



Data

監督・製作：ピーター・ジャクソン

原作：.....

出演：.....

.....

.....

.....

.....

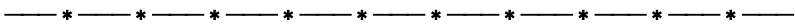
👁️👁️ みどころ

イギリスには帝国戦争博物館があり、そこには第1次世界大戦中に西部戦線で撮影された数千時間に及ぶモノクロ戦争映像が所蔵されているらしい。

『1917 命を懸けた伝令』(19年)のサム・メンデス監督と同じく、祖父が第1次世界大戦に従事したというピーター・ジャクソン監督はそれに目をつけ、『ロード・オブ・ザ・リング』3部作や『指輪物語』3部作のような想像力豊かな創造性とは全く異質のドキュメンタリー映像を！

しかも、その映像に修復とカラーリング、音声を加えて3D映像化することによって、100年前のものとは思えない映像をスクリーン上に！とりわけ、クライマックスの戦闘シーンは、『1917 命を懸けた伝令』に負けないほど、驚くべきリアルさで！これはスティーヴン・スピルバーグ監督の『プライベート・ライアン』(98年)の冒頭約20分の激しい戦闘シーンに勝るとも劣らないものだから、必見！

しかして、今、あの戦争を、そしてあの塹壕戦をあなたはどうか考える？



■□■ピーター・ジャクソン監督に注目！■□■

『ロード・オブ・ザ・リング (第1部) -旅の仲間-』(01年)をはじめて観たのは2002年2月。今から18年前だが、その壮大な世界観と想像力豊かな創造性にビックリさせられた(『シネマ1』29頁)。続く『ロード・オブ・ザ・リング (第2部) -二つの塔-』(02年)(『シネマ2』54頁)も、『ロード・オブ・ザ・リング (第3部) -王の帰還-』(03年)(『シネマ4』44頁)も、心ゆくまで楽しんだ。この『ロード・オブ・ザ・リング』

シリーズ3部作を監督したのが、1961年にニュージーランドで生まれたピーター・ジャクソン監督だ。

その10年後に彼は再び『ホビット』シリーズ3部作に挑み、『ホビット 思いがけない冒険』(12年)、『ホビット 竜に奪われた王国』(13年)、『シネマ 32』未掲載)、『ホビット 決戦のゆくえ』(14年)、『シネマ 35』未掲載)を監督した。私はさすがに、このシリーズは見飽きてしまったが、そんな彼が何と本作ではドキュメンタリーに挑戦!さらに、本作の後には、ザ・ビートルズのドキュメンタリーが待機中というからビックリだ。

しかし、なぜあんな壮大な物語を創造したピーター・ジャクソン監督が今、宗旨替えして(?)ドキュメンタリーに挑戦?しかも、第1次世界大戦の塹壕戦のそれに挑戦?その第1の理由は、後述の「帝国戦争博物館」との接点だが、第2の理由はピーター・ジャクソン監督の祖父が第1次世界大戦に従事していたことにある。ちなみに、去る2月15日に観た『1917 命を懸けた伝令』(19年)をイギリスのサム・メンデスが監督した理由も、彼の祖父が第1次世界大戦時の西部戦線で伝令兵の任務に就いたことだった。それと同じように、第1次世界大戦が始まる4年前にすでにイギリス陸軍の職業軍人だったというピーター・ジャクソン監督の祖父は、開戦から終戦まで「あの戦争」を経験したそう

■□帝国戦争博物館には何が?何をどう活用?どう復元?■□

イギリスには「帝国戦争博物館」なるものがあり、そこには第1次世界大戦中に西部戦線で撮影された数千時間に及ぶモノクロ戦争映像が所蔵されているらしい。第1次世界大戦の終結から100周年を記念した事業として、2018年10月のBFI ロンドン映画祭での上映を目的として本作を企画したピーター・ジャクソン監督は、その中から約100時間の映像資料を選び出し、映像の修復とカラーリング、音声を加えて3D 映像化することに成功したそうだ。

映画検定3級の資格を持っている私の教科書は『映画検定 公式テキストブック』(キネマ旬報映画総合研究所編)だが、近時のデジタル加工技術の進歩は私の理解を遙かに超えており、ボロボロになった古いフィルムをデジタル加工して新しい映像に甦らせるケースが次々に登場している。しかし、本作のイントロダクションによると、本作を監督・製作したピーター・ジョンソンは、第一次世界大戦のモノクロ映像を見事に3D化したうえ、兵士の声もリアルに再現したらしい。また、監督インタビューによると、①映像のスピードを変えたプロセス、②ナレーションに退役軍人の声を使った経緯、③ナレーション以外の音声とサウンド・エフェクトについて、④カラー化について、⑤手回しカメラの技術や復元のための最先端のデジタル技術や最新の映画制作技術について、等々の技術的な問題点を詳細に語っている。したがって、その方面に興味のある人はそれを勉強してもらいたい

が、私はもっぱらピーター・ジャクソン監督が本作でスクリーン上に再現させた映像と

音声を楽しむことに集中！

導入部のモノクロシーンを見ていると、いかにも第1次世界大戦の記録映画というイメージだったが、カラー映像に変わり、一人一人の兵士が饒舌に自分の立場を語り始めると・・・なるほど、こりやすごい！ピーター・ジャクソン監督とそのスタッフの、帝国戦争博物館の資料を活用し復元した努力とその後の音声やサウンド・エフェクトの努力に感服！

■□■徴兵制ではない入隊と訓練風景は？大日本帝国陸軍は？■□■

先日は久しぶりに『風と共に去りぬ』(39年)をDVDで鑑賞したが、その導入部では、ついに始まった南北戦争に我先に志願する南部の若者たちの姿が印象的だった。もともと、ひよんなことでスカーレット・オハラと出征前に結婚することができた若者はラッキーだったが、その彼は戦地ですぐに戦死してしまったからアレレ・・・。他方、太平洋戦争前の日本では厳格な徴兵制が敷かれていたから、『人間の条件』(59～61年)、『シネマ8』313頁)6部作や『兵隊やくざ』(65年)シリーズ等を観れば、徴兵された兵隊(二等兵)の大変さがよくわかる。戦後の日本は平和憲法の下で軍備を放棄し徴兵制はなくなったが、自由の国アメリカでさえ、ベトナム戦争時には世界ヘビー級チャンピオンだったカシアス・クレイ(モハメド・アリ)の徴兵拒否が大問題になった。しかして、第1次世界大戦勃発直後、西部戦線への応援に赴く任務に就くイギリスの若者たちは？

まず、ここでは当時のイギリスが徴兵制でなかったことをしっかり確認しておきたい。そのため、各地では宣戦布告の知らせと共に募兵を呼びかけるポスターが多数貼り出され、そこでは、“今こそチャンスだ。男たちよ入隊を”などのキャッチコピーが入った笑顔の兵士が描かれていた。また、志願資格の規定は19歳から35歳だったが、本作では19歳に満たない若者たちが「誕生日を変えろ」と言われるままに歳をごまかして入隊する姿が明るく(?)かつイキイキと(?)描かれているから、ビックリ！これはまるで『風と共に去りぬ』の風景と同じだ。

他方、それに続く練兵場での6週間にわたる訓練が若者たちにとって厳しく過酷だったのは当然。本作では、その風景が重さ50キロはあるフル装具での行軍や、機関銃・小銃を使った基礎訓練等を通じて描かれるが、「大日本帝国」当時の『人間の条件』や『兵隊やくざ』と全く異なるのは、そこに古兵による新兵いびりや陰湿ないじめが存在しないこと。そればかりか、本作を観ていると、一人前の兵士になろうとする若者たちの間には連帯感が生まれると共に体力もつき、世間知らずだった若者が今や立派な兵士に成長し、早く実戦に赴きたいと希望するようになっていくからすごい。そんな本作での入隊と練兵場での訓練は、ボーイスカウトの延長と同じように楽しそう。そんな印象さえ持ってしまったが・・・。

■□■最前線は？事実は小説よりも奇なり！■□■

第1次世界大戦の塹壕戦（の悲惨さ）は、『西部戦線異状なし』（30年）をはじめとして、『戦火の馬』（11年）（『シネマ 28』96頁）等でもスクリーン上で生々しく描かれていた。サム・メンデス監督の『1917 命を懸けた伝令』（19年）でもそれは同じだ。しかし、（劇）映画は所詮作りもの。本作中盤では、意気揚々と最前線の塹壕に送られてきた新兵たちが、いかに劣悪な環境下で「塹壕戦」に臨んでいたかを、ドキュメンタリー映画特有の生々しさで伝えてくれるので、それをしっかり味わいたい。

もっとも、「塹壕戦」といっても、本作中盤で描かれるのは塹壕内での日常の軍務。すなわち、主に警戒態勢をとることだから、本格的な生死を懸けた戦闘行為ではない。しかし、人間が生きていくためには食事と睡眠が不可欠だし、洗顔、着替え等の身の周りの処理から、排尿、排便という生理現象の処理も不可欠。そのため、数日間に限定されたものとはいえ、最前線での塹壕戦（塹壕生活）は大変だ。もちろん、任務中に雨が降っても雨宿りはできないし、泥の中に突っ込んだ足を洗うこともできないのは当然だ。もっとも、それでもまだ、私が2019年11月17日から19日の沖縄旅行の南部戦線巡りで見学した、糸数アブチラガマ（自然の洞窟）よりは開放感があるだけマシ・・・？また、トイレ事情（？）にしても、アブチラガマの中のそれよりは、開かれた大地のそれの方がマシ・・・？

当初はそんな劣悪な塹壕生活に戸惑っていた新兵たちだったが、しばらくすると少しずつ土の壁に横穴を掘っただけの粗雑な寝床で仮眠をとったり、機関銃の冷却水を使って紅茶を淹れたり、酷い環境下でも笑顔で過ごせるようになってきたからすごい。死体が沈んだ砲弾孔の水や雨水をガソリンの空き缶に貯めて使っても、「煮沸すれば大丈夫だ」と笑顔を見せるまでに・・・しかし、そんな塹壕戦（塹壕生活）はいつまで続くの？そう思っていると、スクリーン上には秘密兵器である菱形戦車が登場してきたから、兵士たちはフランス・イギリス連合軍の勝利を確信することに。しかし、そのためには当然ドイツ軍を徹底的にたたき総攻撃が不可欠。しかし、そうなると、俺の生命は・・・？

本作には何のストーリーもないが、兵士たちの塹壕戦（塹壕生活）を淡々と（？）と描くスクリーンを見ていると、そんな兵士たちの気持ちが手に取るように伝わってくる。ドキュメンタリー映画のアピール力はすごいもの。まさに、事実は小説よりも奇なり！

■□■これはすごい！戦闘シーンの迫力を身体と心で実感！■□■

『ロッキー』シリーズでは、毎回迫力ある「タイトル戦」の「実況中継」を観るのが楽しみだが、そのクライマックスは必ずラストに設定されている。また、ノルマンディー上陸作戦をオールスターの共演で描いた『史上最大の作戦』（62年）や『硫黄島からの手紙』（06年）（『シネマ 12』21頁）では、歴史的事実の経過に沿って迫力ある戦闘シーンが描かれていた。それに対して、スティーヴン・スピルバーグ監督の『プライベート・ライア

ン』(98年)、『シネマ1』117頁)では、ド迫力の戦闘シーンを導入部の20分間に集中させていた。このように、戦争映画でハイライトとなる戦闘シーンを映画のどこに持っているかは監督の自由裁量だが、本作でピーター・ジャクソン監督はオーソドックスにそれをラストに持ってきているので、それに注目!

年齢を偽って応募してきた新兵たちも、入隊後の訓練と塹壕戦での実務体験(といっても警戒任務だが)を重ねる中、『ランボー』シリーズのランボーや、「中国のランボー」と呼ばれた『戦狼2 ウルフ・オブ・ウォー2』(17年)、『シネマ41』136頁、『シネマ44』43頁)の冷鋒ほどの「超一流戦士」とまでは言えないまでも、心身共に一人前の「戦う兵隊」になっていた。サム・メンデス監督の『1917 命を懸けた伝令』(19年)では、ドイツ軍は退却を偽装して攻撃してきたイギリス軍を一気に殲滅するという策略を立てていたから、イギリス軍がホントに総攻撃をかければヤバかった。そのため、その中止を伝える伝令が、まさに「命を懸けた伝令」になっていた。しかし、本作では、菱形戦車の応援もあり、イギリス軍の勝利は間違いなし!軍事的、戦略的見通しはたしかにそうだったようだが、いざイギリス軍の塹壕を飛び出して、ドイツ軍の塹壕に向けて突進していくイギリス軍兵士たちの運命(生死)は?日露戦争で日本陸軍が「二百三高地」を攻略するために払った犠牲もすごかったが、本作のハイライトとなる突撃戦におけるドイツ軍の反撃とそれに伴うイギリス軍の犠牲もすごい。

ホントにこんな映像が帝国戦争博物館に所蔵されていたの?ピーター・ジャクソン監督はその映像をいかに処理したの?そんな技術的なことも含めて、本作ではその戦闘シーンのものですごさを、あなた自身の心と身体で実感してもらいたい。

2020(令和2)年3月5日記